

# 素晴らしき 伝統工芸

## 越前和紙

最高級の和紙が室内を華やかに、そして心地良くしてくれる。

紙祖神・川上御前が、約1500年前に村の人々に紙漉き技術を伝授したという伝説が残る『越前和紙』。それ以来、現在まで技術は伝承され、和紙の一大産地として名を馳せています。

最も幅広く、さまざまなものに対応可能な万能素材なのです。例えばふすま紙。『越前和紙』は、手漉きの繊細さとなめらかさ、そして数々の模様があり、ふすま紙にも優れた和紙として有名です。和紙は植物を原料にしているため、和紙自体が空気を通し、室内の温度調節もでき

る、環境に優しい素材です。高断熱・高气密住宅の室内に、自然の風がうまく流れずに、体調を崩すこともある中、ふすま紙は室内を快適にしてくれる効果もあります。最高級の技で漉かれた『越前和紙』は、部屋の雰囲気や華やかに演出するアクセントにもなることでしょう。

### 素材和紙だけでなく、お札にもなっていた、最高級の品質

東京では江戸唐紙に、京都では京唐紙になるなど、「越前和紙」は素材の和紙としても有名です。それらの和紙が身近な雑貨などに形を変えていくのです。また、明治時代には太政官金札用紙(お札)に使われたこともあるなど、「越前和紙」は当時から全国的にも最高級の品質を誇っていました



# 越前焼

日本六古窯の一つに数えられる、  
自然釉が生み出す模様が魅力的な焼物。

## 粘土の質が可能にした 高温での焼成と、 伝統的技法が息づく

「越前焼」に使われる土には、鉄分が多く、耐火性もあるので、高温で焼く「焼き締め」と、薪の灰が液体になって器に流れ出す自然釉が特徴です。「越前焼」には、陶工自身が作品を中心に回り、粘土を太いひも状にして積み上げていく「ねじたて成形」という伝統的な技法も残されています。

平安時代より続く「越前焼」は、信楽焼や備前焼などと並ぶ、日本六古窯の一つです。その造形的な特徴として挙げられるのが、土の素朴な感じがするのと、言われるほどの渋めの風合いにあるでしょう。

派手さはありませんが、全国にファンも多い焼物です。その理由として、どんな料理にでもとけ込む色合いと、自然釉が作り出す魅力的な模様。さらに斬新な発想や技術、デザインにあります。現在約90の窯元が窯を構え、独自のもの作りに励んでいます。思いつくまま好きなものを選んでみたり、あるいは気に入った作家の作品を集めてみても面白いでしょう。



# 越前漆器

1500年もの歴史を刻む、  
優雅さを備えた器の世界。

## 自然と対峙し、 様々な工程を経て 最高級品となる

漆器生産は素材となる木材の選定・加工にはじまり、下塗り、上塗り、蒔絵、沈金など、様々な作業を分業して行われています。それぞれに専門の職人が腕を競いながらも、他工程の職人を気遣いながら作業を行うからこそ、でき上がったものは最高級のものとなるのです。

『越前漆器』は、約1500年もの歴史があり、優雅な塗り物として有名です。漆黒や朱色の艶やかな塗りと蒔絵や沈金など、日々の生活に美と高級感をもたらしてくれます。

漆器と聞くと、取り扱いが難しく、年に数回使うだけという人も多いのではないのでしょうか。しかし漆器は毎日使える丈夫な器。使いやすさは抜群で、塗り直せるのも特徴です。お碗の他に皿、鉢、杯、装飾品など、種類も豊富です。さらに漆も日々進化し、今では食器洗浄機や乾燥機で使えるものも登場しました。食事にお酒の席に、時には空間演出に、漆塗り製品を置いてはいかがでしょうか。



# 越前箆笥

ほぞ接ぎ技術を今に伝える、  
高質で艶やか、風格漂う箆笥。



# 越前打刃物

最高の技で鍛えられた包丁から始まる、  
楽しく、美しい料理の世界。

## 旧・武生市内にある 産業の中心地 「タンス町」

旧・武生市は丹南地区の中心地であり、産業や商業が発達してきました。街中には「タンス町」と呼ばれる界隈があり、箆笥屋が軒を並べています。職人たちが越前箆笥やさまざまな木工品を制作している風景を見ることができるので散策してみてください。

越前市で江戸時代後期より製造されている『越前箆笥』。釘を使わずに組み立てる「ほぞ接ぎ」の指物技術のほか、鉄製金具や、漆塗りなど、他にはない技巧を凝らした品で、2013年、福井県では越前焼以来となる、国の伝統工芸品に指定されました。  
この地域での木工の始まりは江戸末期から明治初期にかけてとされています。能面作りなどの工芸的な仕事をしていた人や手先が器用な人たちがお膳風呂や板戸などを作り、これらの製作を専門化させていきました。その後、指物師として旦那衆の家に入りするようになり、高価な箆笥や建具を製作してきた技術が今に受け継がれています。

## 食材に合わせて 3種類の包丁を 揃えてみては

毎日の食生活の中で、特に必要なのが、菜切り包丁、出刃包丁、刺身包丁の3本となるでしょう。それぞれの素材に適した厚みや研ぎを施しているため、切れ味は抜群。1本だけを使っていると、包丁の傷みも早くなります。また定期的にプロに研ぎ直しをしてもらうのも包丁を長持ちさせる秘訣です。

約700年前の南北朝時代、京都の刀匠だった千代鶴国安が刀剣作りに適した地を求めて府中（現・越前市）にたどり着き、近郷の鍛冶職人に鎌の製造方法を教えたことが、『越前打刃物』の始まりとされています。  
全国に数ある刃物産地の中でも、越前打刃物は素材となる鋼を約800℃もの火で熱して叩く、日本古来の鍛造技術を生かした刃物作りが続いています。この伝統を生かして作られた包丁は長持ちし、切れ味も良くなります。切れ味が良いと料理も美しく見えることから、世界のトップシェフも越前打刃物を愛用。高品質の打刃物を使えば、料理が楽しく充実したものになるでしょう。

協力 / 高村刃物製作所



# 若狭めのう細工

自然が生み出した美しい色の競演。  
太古より続く貴石細工の真髄。

## 独特の焼き入れが 生む炎のごとき 艶やかな赤

めのうの原石から9つもの工程を経て生まれる若狭めのう細工。中でも特徴的な工程が「焼き入れ」で、灰の中に原石を置き炭で焼く作業を繰り返すことで、独特の艶やかで深みのある赤が出てくる。温度の加減で割れや透明度が左右されるため職人の腕が試される。

めのう細工は日本の貴石細工のルーツとも言われ、奈良時代に鱈族という渡来人が若狭の神社の前で玉を作ることを仕事としたのが起源とされています。江戸時代、高山喜兵衛なる人物が浪速の眼鏡屋奉公中に習得した技をもとに帰郷し玉造りを始め、明治初期には中川清助によって、動物などを象った彫刻品としても発展します。国内外の美術博覧会で展示されるようになり、昭和51年には国の伝統工芸品に指定。その後、需要と後継者の不足から一時は生産量が減りましたが、平成26年に福井県内7伝統工芸の職人により「七人の侍」が結成されたのを機に、その技術は再び盛り上がっていくこととなりました。



# 若狭塗

若狭の海をイメージした塗物は、  
料理を美味しく見せる“宝石”のよう。

## 何重にも塗り重ね、 慎重に研ぎ出すから、 最高の塗物になる

飾りを付け色を重ね、その後には研いで模様を出す“研ぎ出し”は、若狭塗独特の手法です。研ぎ石も数種類あり、少しずつ慎重に模様を出していきます。ちなみに若狭塗は60以上もの工程を経て出来る、時間を要する製品です。塗り箸は全国シェアの実に80%以上を占めているほどの生産量を誇っています

若狭の海底をイメージしたものとされ、かつては「宝石塗」とも呼ばれていた「若狭塗」。漆の色の他に白や赤、緑、黄色など、実に多彩で華やかな塗物です。江戸時代に小浜藩主・酒井忠勝公が奨励して以来、一気に花開きました。丈夫な木地の上に、先代から受け継いだ模様を飾り、色を塗り重ね、石で研いで模様を出す伝統的な技法が今も続きます。その模様の元となるのは、貝類や卵の殻、松葉など。意外と身近にあるものばかりというのも、特徴と言えるでしょう。漆黒の上に光る装飾は、盛りつけた料理をおいしく見せるだけでなく、その場に会する人との会話も賑やかにしそうです。



# めがね

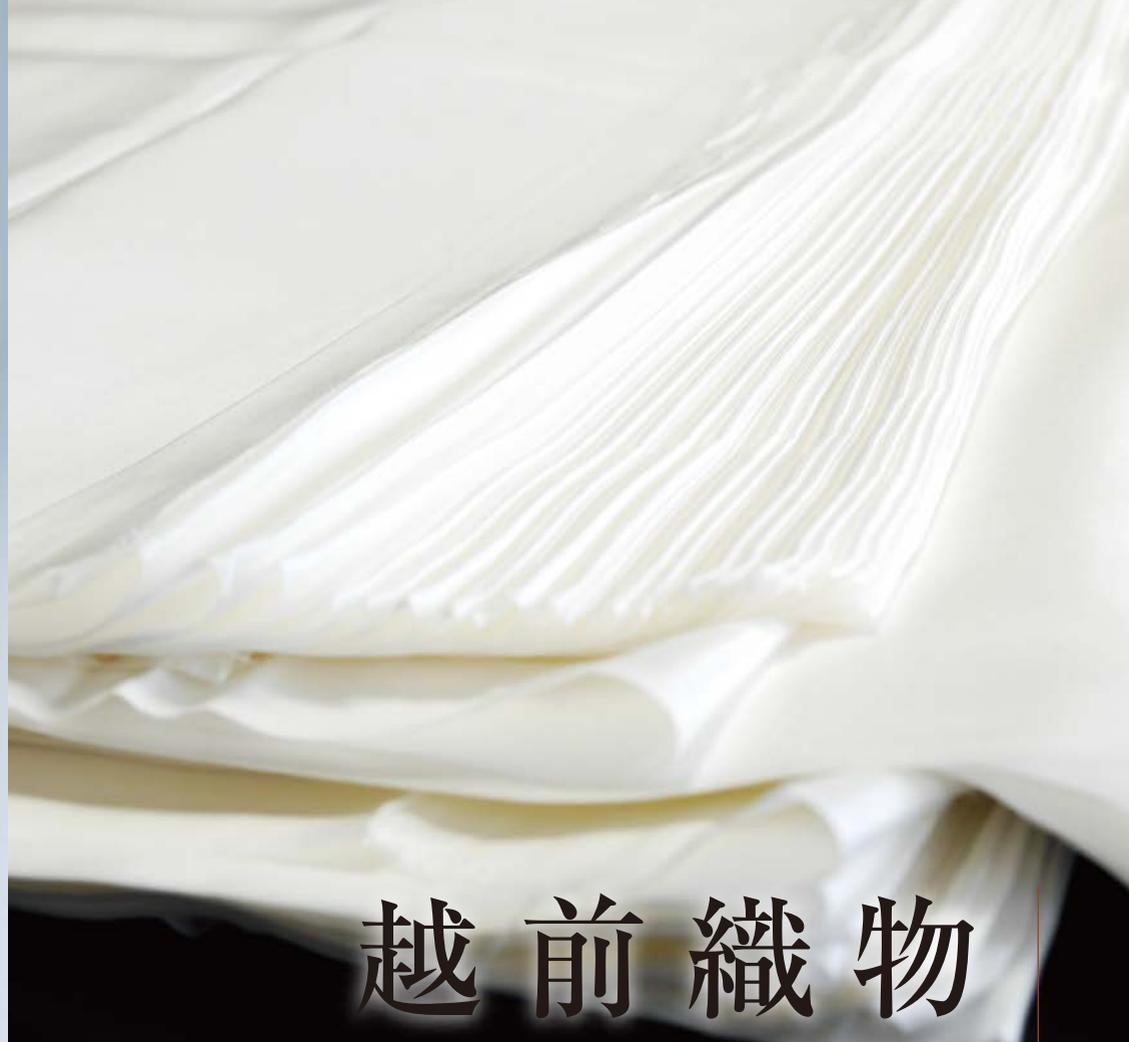
世界に誇る“ものづくり”への情熱、  
未だ冷めやらず。

## 工程は最大200。 めがね職人の街に 移住する人も多い。

めがねは多いもので200以上の生産工程がある。それらは一つの会社で完結せず、一つひとつが専門の職人の手によって完成されていく。鯖江市は街全体が職人の街となっている。さらに、チタンフレームをはじめとする、革新的な技術と開発力を持つなど、めがね業界のまさに“聖地”であり、県外から職人を希望してやってくる人も多い。

めがね枠の全国シェアは9割以上、世界に比肩する一大産業として圧倒的な生産力を誇ります。生産が始まったのが1905年のこと。農閑期を使って新しい産業を取り入れたのがきっかけでした。膨大な生産工程の内容が、勤勉で我慢強い福井人の性格にも合致したことから、鯖江は一大生産地として広がっていきました。

先人たちが努力を重ね、磨き上げてきた繊細で高度な技術は、決して真似ができるものではありません。技術大国・日本の核である“ものづくり”に対する情熱の炎は、福井の人の中に燃え続け、今日も新しい技術革新に邁進しています。



# 越前織物

衣料だけじゃない新しい繊維の可能性は  
約2000年の知見が詰まった街から。

## 織物生産における 各工程が詰まった 産出県としての誇り

福井県は多種多様な織物製造できる、全国でも希少な総合産地です。さらに糸から生地にするまでの工程も集積しており、その技術力や開発力、そして品質は世界でもトップクラス。異業種への展開も可能で、繊維の可能性が広がっています。

福井での織物生産は、一説によれば2〜3世紀頃ともされ、以降絹織物産地として文献にも登場してきます。明治に入り、細井順子らが京都へ研修に行き、福井にもどってきて当時最先端の「バタタン機」操作の講師を務めてから産地として飛躍します。県内でも工場が建てられ、明治20年代には「羽二重」と呼ばれるきめ細やかな絹織物の一大産地となったのです。その後、不況を経て人造絹糸（人絹）が盛んになり、全国初の人絹取引所まで開設されるほど、世界に名を轟かせる産地に成長していきました。現在はその技術を使い、医療や建設、エレクトロニクスの世界にも進出しています。